

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	巢立ち前 : 創作
Author(s)	松井, 武州
Citation	龍南, 230 : 58 - 64
Issue date	1935-02-23
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7247
Right	

巢立ち前

松井武州

徹は陸橋の上にたたずんで繪畫館の圓屋根に照りつけてゐる夕日の色が次第にあたりの夕闇の中に消えてゆくのを眺めて居た。左手をのせてゐる鐵の手欄はまだ生溫るくつて、蒸れた白ベンキの嗅がよろ／＼と立昇つては、絶間なく走り過ぎるタクシーの跡をあわてて追ひかけてゐた。人通りは少なかつたが、低い唸聲の様な音が空一杯に擴つて居た。省線電車の轟音が近付いて遠退つていつた。徹は緊張して涼子が来るのを待構へて居た。

やがて朱色の太陽が神宮の森に沈んでしまふとあたりに浮かんで居た無數の埃が消えて、外苑の並木の中に柔らかな街燈の光が點つた。凡てはあの日の儘であつた。あれが最後にならうとは。あの日涼子は青いドレスを上手につけて居た。あれは黄色の下着が透いて見えるほど薄かつたので並んで歩いたら快よい甘い嗅がにほつて来るほどでつた。

「どうを、似合つて、すこうし胸んところがきついんだけど、夕方はこの色が一等目立たないんですもの。」

あの頃、涼子はまだ香はしい少女だつた。取止めもないことに聲を立てゝ笑ひ乍ら、外苑を一周して、この陸橋の上で別れたのだ。何も考へてみやうとはしなかつたあの頃だ。むしろ幸福と言ふことさへも。確かな職業さへ見付かつたら幾年だつて待つてゐる、と涼子は言つた。學校さへ卒業して仕舞てたらなあ、と徹は答へた。それから三年と言ふ月

日が流れ過ぎたのだ。涼子は結婚して郊外に住んで居る。徹は九州の大學に入學して、休暇毎に両親に顔を見せるために歸京した。凡ては流れ過ぎたのだ。

徹は既に考へねばならないことは考へて仕舞つて居た。舗道の上をゆるやかに匍つてゆく宵闇が有難つた。再び涼子と逢はうとして居る。手を取合つて遠い九州に逃げやうとして居るのだ。徹は今迄に幾度も忘れてしまいたいと思つたしかし涼子は始終美しい、香はしい幻影になつて魂に私語きつづけるのだつた。若しも彼が學生ではなくして、彼女が確かな職業にありついて居たならば——涼子は一頃タイプライターを練習すると言つてゐたのを想出す。

宵闇の底に無數の燈が並んで居た。徹はくつきりと浮上つて来る黒い屋根を眺めて居た。遠い夜空にゆれるイルミネーションが冷たい光芒を十文字に交錯して居た。徹はポケットの中の札束をぐいと掴んで嘲笑の目を投げやつた。

「今迄は押し潰されて來たんだが。」

今や、激しい情熱は未來を忘れかけて居た。目に見えない冷酷な運命の意志に噛みつかうとしてゐた。逃げるんだ。百圓餘りある。涼子も自分の貯金を持出すと言つて居た。慕ひ合ふ魂にこそ共に生きて行く權利があるのだ。百圓をもとにして稼ぐんだ。徹は再び札束を握りしめてはるかな夜空に目を投げた。二人は是が非でも共に生きて行かねばならない情熱を持つて居る。どうにでもして食つて行かう。成功するに違ひない。万一成功するかもしれないなどとは思はない徹だつた。考へるだけ考へてしまつた彼だつた。

偶然——これは二人の上には決してあり得ないことだ。今日の午、新宿驛のあの雑踏の中で、この三年間書き續けて居たあの腫にぶつつからとは。かつちり會つた腫と腫は無言のうちに昔の儘だと叫び合つたではないか。あれが偶然だ

とどうして考へられよう。二人の魂の行手に偶然があるとは誰が斷言出来るだらう。涼子は逃げると答へた。眞實の生活の途を進まう。如何に苦しくとも生活戦線で闘はう。涼子は働いてもよいと言つた。あの腫は強く輝いて居た。二人の心は昔の儘だ。

徹は急に氣が弛んで、宵闇に包みこまれてゆく自分の姿を眺めやうとした。その時、省線電車の轟音が近付いて來て、遠退つてゆくと、陸橋の下から虫賣りの澄んだ賣り聲が流れて來た。徹は不意に、あの時白く光つて居た白銅貨を想出して、その時の薄氣味悪い恐怖が心の上を疾り過ぎたのに驚いた。ひつくりかへつた踏臺。裏返しになつて居る小箆笥の小抽出。一錢銅貨や白銅貨が疊の上に散らばつて居た。幼い徹には母の顔が憤つて居るのか、悲しみに充ちて居るのかよく分らなかつた。

「何が欲しくてこんなことをしたの、一等いけないことなのよ。ほんとにまあこの子は——何が欲しかつたのよ。今迄何でも買つてあげたぢありませんか。仰言いたら。」

その時、虫賣の聲がした。突嗟に嘘言をついて鈴虫が欲しいんだと泣聲で言つたので虫屋が呼込まれた。涙に濡れた頬を柔らかな母の胸に押けながら甘つたれて見たが母は笑はなかつた。甘酢つばい香がして居た。冷たい悲しさうなあの腫を想出す。

ふるえる様な、流れるやうな虫賣の聲の合間に、りーん、りーんと清らかな音が聞える。徹は急に胸の中が熱くなつた。この三年間、母は始終慰めて呉れた。希望を持たせて呉れた。

「その氣持だけは一生美しく持つてても恥ずかしいことぢやないんだよ。母様に何が言へるのですか。」

あの時、既に盛りの過ぎた母の顔にさつと若い血潮が甦つたのを忘れはしない。涼子と逃げたあとで、母は一體どう思ふであらう。どんな顔をするだらう。

りーん、りーんと冷たい音が心の底迄しみこんで來た。徹は突然こみあげて來た苦しみのために我を忘れて平欄から乗出さうとした身をひいて、無意識に札束を掴んだ。

若い情熱がどつと溢れ出して、凡ゆるものに反撥した。

俺は、俺達は押し潰れて居たんだ。慕合つてるんだ。一生に一度の戀のためだ。魂の叫びのためだ。眞實の生活に進むのだ。精魂を盡して働くんだ。生活と取組み合はう。誰が拒むもう。誰が妨げよう。

涼子はまだ來なかつたが、徹は眞黒く宵闇の底に擴つて居る巨大な市街にむかつて立ちはだかつて居た。

「少しはよくなつたかい。」

「御免あそばせ。介抱なんぞしていただいて。」

「あそばせはよせつたら」

徹は朗らかに笑はうとしたが聲が出なかつた。涼子は口にあてて居た白い半巾をはずして立上つた。べつとりした黒い粘液を覗きこみ乍ら、二人の魂は露らはに向かひ合つた。

「コーヒーかしら。」

「うむ、三杯もあつちこつちで飲んぢま」つたんだもの。冷たすぎたんだ。」

徹は後悔して居た。いざ東京を去るとなると流石懷にしくなつた。十時迄に歸宅すると言ひ残して來たからもう一汽車延しても發見される心配はないと涼子が言つたので二人は銀座に別れを告げに行つたのだつた。考へるだけ考へてしまつた徹は涼子と逢ふと共に何の心配も、怖れもなくなつた。徹は意氣揚々として歩いた。だがこんな事にならうとは氣分が悪くなつた涼子を抱へるやうにして有樂町のガードの下迄たどりつく迄に徹の落着はどん／＼崩れて行つた。

どうつとガードの上を省線電車が疾り過ぎる。氣分を直すために二人は東京驛迄、靜な丸の内街を歩くことにした。

涼子はのろ／＼歩いた。時間はどん／＼流れ去つた。あと三十分。徹は焦立つた。後悔した。あの汽車に乗つてれば今頃は箱根を越して居るだらう。新しい生活への首途は既に進行して居るだらう。力と情熱で二人は働くこと許り語合つて居るだらう。徹は身をふるはせて涼子の腕をとつた。人ツ子一人通らない丸之内街は眞暗だつた。兩側の巨大なオフィスがじわ／＼と柔らかな魂をしめつけた。街燈が冷酷な眼付きで睨んで居た。徹はそこの建物の中で涼子の夫が若い支配人になつて居るのをよく知つて居た。勿論その地位が親の七光りなもの。だが人ツ子一人通つては居なかつた。徹は一刻も早く明るい驛前の廣場に出たくなつた。陰險で、一寸の假籍も許さない怖しい力がひた／＼と包み込ふとするのだ。涼子の腕はどん／＼力がなくなつて來るやうだ。時間は刻々と流れ逝く。生活。徹は焦つた。巨大な建物が柔らかな魂の上をローラーの様に通り過ぎる。徹は涼子を引摺る様にして急いだ。

「大丈夫、大丈夫よ」

と涼子は機械的につぶやき始めた。

家庭。徹は不意に今朝家を出て来る時のことを想出した。少し餘分だがと學資を渡し乍ら粗末には使ふなと母が繰返した。妙に陰鬱な居間の柱で古い柱時計が九時を打つたのだ。母も若い頃からの胃弱で苦勞して居る。

それが何だ。

徹の情熱は一切のものをつきとほして、新しい彼方を目指して居た。徹はぐつと腕に力をこめて涼子を引寄せた。涼子はぐつたり身を投げかけたが、もう進まふとはしなかつた。

「どうした。痛むのか。」

涼子は悲しい顔をあげて首を横にふつた。

高い中央郵便局の建築かぐつとのしかかつて來た。時は刻々と流れ行く。驛前の廣場がその向ふに明るくほほえんで居た。徹は焦つた。

「さあ、行かう。」

しかし涼子は動かうともしないで徹の顔を見上げた。しく／＼泣出した。

「御免なさいな。御免なさいな。私、心は——心だけはちつとも變つちやぬないわ。」

徹は呆然として手を離した。同時に無意識に叫んだ。

「さあ、行かう、進まう。」

「駄目、私資格がないわ。どうしよう。——宅が、宅は。濟みません。だつて私、心だけは變らないわ。」

徹は何の感じも起らなかつた。ただのしかかつて來る暗い冷たい重さに反撥しやうとして居る魂だけを見詰めて居た。

一瞬にして凡ては變つたのだ。新しい生活への情熱も、計畫も、それからその生活の自信さへも消えて仕舞つた。激しい苦しみと悲しみにびく／＼して居る涼子の口邊にほのかな微笑が歪んで消えた。徹は一步、二歩と退きながら、まるで彼女の愛情の印さへも抱きしめるのを忘れた様に眞黒な街を見詰めた。涼子は動かなかつた。白い白痴の様を表情には既に苦しみの跡さへ見付からなかつた。

凡ては流れ去つたのだ。

徹はちよつと手を振つて身をひるがへした。愛しかつた。悲しかつた。しかし徹は口惜しくも、腹立しくもなることが出来なかつた。凡てをぐい／＼押へつける奇妙な力が彼の心を存分にさせなかつた。

見開らいた瞳を据へた儘、明るい、華やかな東京驛の待合室に踏込んだ時、徹はまだ切符を買つて居ないのに氣がついた。

きつと今頃は箱根を下つてしまつて居るだらう。

徹は三等二割引券に書き込みながら、砂漠の様な、樂天地の様な教室を不意に思出した。